

心豊かな世代が育つ

童話の里づくり

453

―シリーズ― あなたの人權・わたしの人權

『人がもつイメージ』

塚脇小学校 4年

吉原 聖真

ぼくは、十二月に学校の授業で人權の学習をしました。

その授業では、「クレヨンをめすんだのじゃねえ」というお話を読みました。

このお話は、ふみきり向こうにすんでいるサヨちゃんやよっちゃん、さぶちゃんたちが学校で差別されるお話です。

また、サヨちゃんたちだけでなく、家族も同じようにひどい差別をうけながら、苦しい生活をしています。

このお話を読んで、ぼくたちのクラスでは、どうしてそんな差別をされるのかについて考えました。しかし、ぼくはわかりませんでした。

そして、そこで部落差別ということを知りました。部落差別とは、ある地区に住んでいる人たちが差別を

されることです。

何も理由がないのに、ふみきり向こうに住んでいる人たちが差別をされるのはおかしいと思いました。

そして、先生から「このおかしい部落差別は、今もなくなっていない」と教えてもらいました。

部落差別の勉強をしたあとに、道徳の授業で「ブラジルからの転入生」というお話を読みました。

その話の中でクラスにブラジル人が転入してくる場面がありました。クラスのみんなは、ブラジルという国のイメージから「サッカーが上手い人だ!」と思って喜びました。

しかし、その転入生はサッカーがとても苦手でした。みんなは、期待外れだったと落ち込みました。

ぼくは、このお話を読んで「人は住んでいる場所でイメージをきめてしまおう」と思いました。

たとえば、みなさんは「大阪の人」ときいたら、どんな人を想像しますか。

ますか。

ぼくは、関西弁を話す、とてもおもしろい人を想像します。他にも「東京の人」ときくと、大都会に住むお金持ちの人や事件が多いから少し怖い人というイメージをもっています。また、アメリカ人だったら力の強い人をイメージします。

ぼくだけでなく、同じクラスのほとんどの人が同じようなイメージを持っていました。

しかし、実さいにはこの話のように、イメージ通りの人もいれば、そうではない人もたくさんいます。

「人は住んでいる場所でイメージを決めつけてしまう」ということは、部落差別でも似ていることだと思います。正しいかどうかわからないイメージやうわさで、ある場所に住んでいる人を差別しているのだと思います。

ぼくは、このような差別できずつく人がいるのはおかしいと思います。この差別が今も残っていることがとてもいやです。だから、差別をなくさなければいけないと思いました。

この部落差別をなくしていくために、ぼくにできることは、人をイメージやうわさで決めつけずに、なかよくすることだと思います。

そのために、明るいあいさつをすることやたくさん話をして、その人のことを良く知ることを大切にしたいと思います。

休み時間は、自分たちのクラス、そして他のクラスや色々な学年の人といっしょに遊んだり、たくさん話をしたりして、相手のことをよく知りたいと思います。

そして、このひどい差別をなくしていきたいです。

(学年は投稿時の学年です。)

この人權作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。また、みなさんの投稿もお待ちしています。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを、二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して(匿名可)、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人權・わたしの人權」までお届けください。

